

---

# クトゥルー奇譚? 彼方からの手紙

秋月乱丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クトウル―奇譚？ 彼方からの手紙

### 【Nコード】

N7124W

### 【作者名】

秋月乱丸

### 【あらすじ】

突然失踪した親友から届いた手紙。

ソレを読んだ主人公はこれまでの世界観を打ち砕かれる。

その手紙には一体何が書かれていたのだろうか。

## 突然の失踪（前書き）

シリーズとしてはホラー（と言うか恐怖モノ）なんですけど、今回はかなりSFに近いかなど。宇宙論がメインだし。んなワケで今回はジャンルを「その他」にしてみました。

「予約掲載」にしたら尻切れトンボになってましたので、消えた部分を書き足して再投稿です。  
頼むよ運営さん・・・。

## 突然の失踪

僕の親友が失踪してから1カ月が経とうとしている。

彼とは小学校以来の付き合いで、僕が4年生の時に転校してきてからずっと共に過ごして来た。中学・高校と同じ学校に進学し、大学受験を控えた高校3年生の夏休みに突然姿を消してしまった。原因は不明。書置きも何も無く、これまでそんな事をしてかすような様子は全く見られなかった。特に何のトラブルも無く、成績も順調。受験に対しての心配も無かった。家族や僕を含めた友人達、それに彼女 付き合い初めて半年程だが も突然の出来事に驚き、また悲しむ事しか出来なかった。

ここで彼の人物像について記しておこう。失踪したのは大田一樹おおたかすきで18歳。中肉中背で少し乾燥気味の黒髪をやや短めぐらいにしてある。目がパツチリとしていて、イケメンとまではいかないが愛嬌のある顔立ちをしている。正義感の強い性格で曲がった事は大嫌いな、いわゆる男くさいタイプだ。スポーツに関しては極普通の身体能力だが、学業については「好きな分野に関しては勉強しなくても学年トップクラス。だが嫌いな分野はいつも赤点ストレス」という絶妙なバランスを保っていた。よく言う天才タイプなんだろう。その得意な分野は現代国語と理系全般。彼が言うには「得意なのは現国で好きなのは理系」だそうだ。つまり物理や化学は好きではあるが、現国ほど「得意」なワケでは無いのだろう。現国は授業を聞きもしない状態でも常に学年順位が一ケタというムカつく成績をキープしていたが、物理・化学は授業を聞かないといけないとか言っていたが、つたのも今となつては胸が痛む思い出だ。

一方の苦手分野である数学・英語は最初から授業さえ聞く気が無かったと言っていた。ソレで赤点を取らなかつただけ大したモノなのかも知れない。

彼女は清楚な感じで大人しめのタイプだ。性格のいい娘で、間近で二人を見ていた僕も嬉しかった。彼はいい奴だがどうも不器用で、上手い事が言えないタイプだった事が響いてか今の彼女が初めて出来た恋人だったのだ。僕も親友には早くいい彼女を見つけて欲しいと思っていたし、彼ならもっと早く見つけられるはずだと思っていたのだ。

だが現実がそうならなかったのは、やはり不器用な性格のせいだったのだろうか。それに惑わされず、本質を理解してくれる彼女 （新） 谷香 （やかおり） と出会えたのは神に感謝すべきだったのかも知れない。

また、彼が幼少の頃から大好きだったモノに天文学 と言うより星そのものが挙げられる。星空を眺めていれば、何時間でもそのまま過ごせると言うのだから筋金入りだ。去年にひと夏のアルバイトで念願の天体望遠鏡を手に入れた時には、まるで子供の様に喜んでいたので、よく観望に付き合わされたものだ。どちらかと言うと運ぶための手伝いだったのだが、縁の無い人には一生見る事の出来ない遙か彼方の光景を見る事が出来たのだからその点は感謝している。

そんな彼だから、失踪した時も一人で天体観測に出かけて事故に遭ったのではないのかと疑われたが、大事な天体望遠鏡がそのまま残されていた事と、いつも観望に出かける自宅近くのT川 O 県3 大河川の一つだ を搜索しても遺体が見つからなかった事からその線は無いモノとされた。

営利誘拐にしては犯人から何の要求も来ない事から、コレも無いと判断された。と言うよりも、無くなっていったモノはパジャマだけだったのだ。つまり、下手をすると「部屋の中から忽然と姿を消した」可能性すらあるのだった。

しかし、そんな「現代版神隠し」など誰も信じはしない。当たり前だが、この21世紀の日本でそんな迷信を口にするなどオカルト信者だけだ。

そう思っていたのだ。今日の今日まで。

僕が信じていた世界は今日、ガラガラと音を立てて崩れ去った。有り得ない事が起こったのだ、大田の身に。

そう考えるのが最も合理的であろう事が今日、僕の身に起きてしまった。

失踪した大田からの手紙と思しきモノが届いたのだ。突然、それも僕の部屋に直接。手紙と思しきものと言うのは、ソレの材質がどう見ても「紙」では無いからだ。と言ってプラスチックでもないし金属でもない。僅かに曇りがあるが透明度の高いプラスチックの様に見えて、やけに重みがある。プラスチックでこの重みはおかしいし、金属ならこの透明感は無いだろう。文字はこの「紙」 表現のしように無いのでこう呼んでおく。に彫り込まれるかたちになっている。透明なプラスチック板に文字などを刻みこむと光が内部に反射して光って見えるが、あんなカンジだ。そして書かれていた内容は僕の精神を蝕む類のものだった。

その内容が本当なのかどうかは、既に確かめる手段が無い。何故ならこの「手紙」は読み終えた瞬間にボロボロに崩れ落ち、真っ白な灰になってしまったのだから。

だからコレはもしかすると僕の妄想、或いは白昼夢だったのかも知れない。いや、むしろそうであって欲しいと切に願う。仮にこの内容が全て真実だったとしても、近いうちにどここうと言う事は無い。その通りになるのは数十億年以上先の話だ。それでもこの宇宙の未来に関するあまりにも意外で絶望を伴う事を知れば、例えソレが遙か未来の事ではあっても心穏やかではいられないだろう。

この恐ろしい話を出来るだけ忠実に再現してみる事にする。僕の親友の身に起きた人外の恐怖も含めて。

コレが真実かどうかは、遙か遠い未来に分かるだろう。

続  
く

## 突然の失踪（後書き）

肝心の手紙の内容は次回からになります。前書きにもあるように宇宙論がメインになります。

平易な言葉で分かりやすく書くつもりです。どうかお付き合いの程を。



## 手紙 ？（前書き）

取りあえず書けた部分からアップして行こうと思います。

何しろ仕事が忙しいんで、いつ書ける事やら分かりませんしw

## 手紙？

この手紙の内容を書き記す前に、どうしても先に記しておかなければならない事がある。まず、宛名書きに「黒田義彦様くろたよしひこ」と僕の名前が横書きで刻まれていた。そしてその後ろになんと表現すればイイのか。円を基準とした複雑な模様が刻まれていた。一見すると幾何学的な法則性があるように見えるが、良く見ると無秩序な印象を受ける。そんな奇妙な模様だ。

そして裏書きには「大田一樹」の名前と、やはりその後ろに奇妙な模様が刻まれていた。が、こちらは三角形を基本とした構造で、やはり幾何学的に見えて無秩序に思える、そんな模様だった。そしてコレ等が後に、恐怖を運んで来る役割を担うのだった。

それでは「手紙」の内容を書き記そう。僕が記憶している限り正確に。

久しぶりだね。突然の事で驚かせてしまった事と思う。まずそれを謝りたい。本当にすまなかった。だが、僕が意味も無くこんな事をするワケが無いのは分かってもらえると信じている。まずはソレを説明しようと思う。が、この手紙の裏表に刻まれていた紋章と云うか模様は見てもらえたかい？もしまだなら先に見ておいてくれ見たかい？円を単位とした方が「星の扉」、三角を基準とした方が「星の門」と呼ばれる魔法陣だ。コレで僕と君の間にチャンネルが開いた。いつでも君の夢の中に訪れる事が出来るようになったんだ。その証拠に今夜君の夢の中に現れてみせよう。言っておくが僕は正気だ。以前の僕ならこんなオカルト的な事は絶対に言わなかったが、

今は違う。そう、科学を超越する　いや、科学が未だ到達しえない領域に触れたんだ。ソレは一見非科学的に見えながら極めて科学的であり、また体系的にも実に論理的で秩序立っている。現代科学ではまだソレが発見されていないだけなんだ。いつの日か人類はソレを発見し理解するだろうと僕は確信している。

さて、本題に入ろう。とは言え、何処から何処まで話したもののか・  
・そうそう、君は僕がそう言う度に「発端から初めて終わりが来たら止めればいいんだ。」と言っていたね。ではそうしよう。

僕が宇宙に関して飽くなき情熱を燃やしていた事は良く知っているね。ソレは僕の中で膨れ上がり燃え上がり、もはや渴望と言ってもイイ領域に達していた。夜空を見上げては目には見えない深宇宙を思い、青空を見上げては太陽の光にかき消された星々を思う。同時に遙か彼方の星明かりをかき消す太陽も思う。どうして星々と太陽を同時に見る事が出来ないのだろう。いや、科学的な理由は分かり切っている。太陽の光が強過ぎるだけだ。だがそれでも同時に見たいんだ。ソレが叶わない事が恨めしい。そして何よりも自分達が住むこの宇宙の全てを知り、理解出来ない事が我慢ならない。現在のところ人類に観測できているのは、この宇宙のほんの数%に過ぎないんだ。90%以上は謎のままだ。そんな事は僕には耐えられない。そんな生活が続いた。

そんな時だ、あの謎の男　セプティマス・ビショップと名乗る人物が僕の前に現れたのは。

続く

手紙 ？（後書き）

まずは本題に入る前の導入部分ってカンジでしょうか。  
宇宙論に入るのは次かその次か・・・。

手紙 ？（前書き）

かなり間が開きましたね（汗

設定が先走り過ぎた感がありますが、まあ・・・どっぴりかなるで  
しょw

一応ラストまで（頭の中では）出来上がってますし。

## 手紙？

あれは夏休みに入る直前の夜だった。よく晴れている夜だったので、僕がいつもの場所　T川の河川敷グラウンドで望遠鏡を出していた時だ。天の川にあるM8干潟星雲とM20三裂星雲を視野に入れようとしていると、年配の男性が近付いて来た。そろそろ熱帯夜が当たり前になるうかというのに、僕にも一目で高価そうだと分かる三つ揃いのスーツを着こなして、今時珍しいステッキを手にしていた。

その男性は僕に気さくに話しかけて来たんだ。

その声に振り向いた僕は、少々面食らってしまった。一目で外人だと分かる彫りの深い顔立ち。特徴的な鷲鼻。きつとシルクハットを被って片眼鏡モノクルをかければ、アルサーヌ・ルパンの物語に登場してもおかしくないと思える風体だったんだから。しかし、ややぎこちないが十分に流暢と言える日本語を操っていた事から日本暮らしが長いのか、或いは高い知性を持っているんだろうと思っ普通を受け答えしていた。どうも日本語を使って話しかけると警戒心を抱きにくいのかも知れない。

その人物はセプティマス・ビショップと名乗り、昨年の春にアメリカのマサチューセッツ州ダニッチから移住してきたのだと語った。仕事で十分な成果を出した後は後進に道を譲って、かねてから興味を持っていた日本にやって来たのだそうだ。今はこのS市に多数ある古墳の研究をしているが、きりが付いたらまた古い歴史のある町に行こうと考えているらしかった。

また天文学にも多大な興味を持っているらしく、たまたま夜の散歩に出た所で僕を見かけ関心を持ったらしい。僕もご多分に漏れず同好の士に対してはすぐさま好意を抱くので、望遠鏡を覗かせてあげ

たり天文学について語り合ったりした。それで分かったんだが、このビショップ氏はとても高い知性があり、実に科学的な思考力と探究心を持っている。

その後も何度か僕がいつもの場所で天体望遠鏡を出している時に会い、ビショップ氏がここからさほど遠くない場所に住んでいると知り訪れる事となった。

それが僕の運命を変える事になるとも知らず。

手紙 ？（後書き）

取りあえずコレでアップ。

チヨコチヨコ書いて行きます。

頭の中ではあと3本ぐらいは出来てるんですが、時間が足りない・・・。



## 手紙 ? (前書き)

ほぼ一カ月ぶりの更新になってしまいました。

居るかどうかは分かりませんが、待っていて下さった方にお詫びとお礼を捧げます。

## 手紙？

セプティマス氏の邸宅はT川に架かるK橋を渡ったK町にあった。君も知つての通りK橋はJRのH線K駅の正面にある。「フケだらけの野暮ったい名探偵」が初登場した推理小説はココから始まっているのは地元じゃ有名だが、まあソレはイイ。自転車でK橋を渡り暫く進むとO川が見えて来るが、その手前の交差点で左に折れた先の途端にうら寂しくなると言うか、のどかな田園風景になるその中にセプティマス氏の邸宅があった。

真新しい白を基調とした石造りの屋敷。何と言う石かは分からないが重厚で深みのある色合いだった。敷地も150坪ぐらいだろうか、十分な広さがあり植木も手入れが行き届いているように見えた。だが何故だろう。周りは田園で開けていて日当たりも良く、白く真新しい屋敷なら有り得ない程に陰鬱な雰囲気が漂っていた。

何か　どこかは判然としないが　僕が生きて来た世界とは違うモノを感じながらも不思議と躊躇無くインターホンを押していた。すると若くどこか抑揚の無い女性の声が聞こえて、来意を告げると門扉が自動で開き　今思うとこの時モーターの音はしなかったな

ドアが開きメイド姿をしたいやに肌の白い、しかし白人とも東洋人ともつかない不思議な顔立ちをした情勢が現れて僕を招き入れた。

きつと僕と同年代なんだろうな　そんな事を考えながら付いて行く　と書斎らしい部屋へ通され、正面にある安楽椅子にセプティマス氏が座っていた。一通り挨拶を済ませると立ち上がって僕を歓迎した彼は僕に椅子を勧めながら自分も安楽椅子に戻ったんだが驚いた事にその間、彼は全く足音をさせなかったんだ。この屋敷は外国人のセプティマス氏らしく土足だと言うのに。座って足を組んだセプティマス氏の靴はどう見ても極普通の　いや高級品にしか見えないが　革靴だったんだが。

そんな僕の驚きに気付いた風も無くメイドに飲み物を持って来るよう指示したセプティマス氏は今まで通りに語り始めた。

「この屋敷に招待したのは君が初めてだよ。永住の地では無いとは言え愛する我が家だ、招く開いては選びたいからね。」

「光栄です。しかし・・・凄い書斎ですね。」

部屋の中の壁と言う壁を埋め尽くした年代物としか見えない本棚を見回しながら僕は答えた。ある本棚には、これまた年代物にしか見えない様々な言語で背表紙にタイトルを書かれた分厚い本がぎっしりと詰め込まれ、隣の本棚には日本語の学術書・新書　タイトルからすると科学関係と歴史モノが大半だ　が並ぶと言った様子だったんだ。きつと君も僕同様の言葉しか出なかつただろうと断言出来る。だが帰って来た答えは　そう、ある意味で予想通りのモノだった。むしろこういう場合にはお約束と言ってイイのかも知れない。

「何を言っているんだね。地下室にはこの10倍はあるのだよ。」

「え・・・本当ですか!？」

「本当だとも。君さえよければ後で案内しよう。」

「是非ともお願いします!!」

その時だったと思うが、ノックの音がしてセプティマス氏が入るよう答えると先刻のメイドがコーヒを持って入って来た。遠慮なく頂くと今まで口にした事が無い程の美味さだったのを覚えている。

(さすが海外の上流階級は違うな・・・)なんて思いながら宇宙談議に花を咲かせていた。

様々な宇宙開発の裏話や天体発見の歴史、その為の技術開発、ソレに伴う人間ドラマ。宇宙と人類の信仰と神話。

どれ一つ取っても自分の知識がいかに浅薄なモノだったのかを思い知らされた。そんな僕にセプティマス氏はこう語つたんだ。

「日本は技術大国だと言うのにこの本の少なさ、内容の浅さはどうした事だ。例えばアメリカには『サターンV型ロケットの第一ブースターだけの研究書』が有ると言うのに。」

「いやソレは・・・と言うかアメリカ人はそこまで突き詰めるものなんですか？」

「と言うより知識を求める人の層と質の違いなのかも知れないね。まあその反面、宗教の所為か客観的・科学的な事実を受け入れない人が多いのも事実だ。」

「未だに進化論を受け入れない人が多いと聞いた事はあります。」

「ああ、全く嘆かわしい事だ。だが逆に君の様に知識を求める者には実に良い所でもある。一個人もだが、国にも世界にも、そして宇宙にも数えきれない程の多様な側面があるのだよ、中々実感出来ないがね。」

「頭では分かっているつもりです。」

「十分だ。君ならいずれ実感する日が来るだろう。」

そしてそのまま話は哲学的な性格を帯びていった。

宇宙の果てはどうなっているのか？何故ビッグバンは起こったのか？時間の果ては？宇宙はどこまで膨張するのか？

確かにある程度は科学的に考えられている部分もある。しかしまだまだ研究の途上でしかないし、むしろ僕の知識欲を刺激するだけでは無かった。

続く

手紙 ？（後書き）

当初は4000文字ぐらいで予定していた話なんですが・・・順調に長くなってますW

執筆ペースと同じくダラダラと延びまくりですね。

拳句の果てに全く別のシリーズまで思いついている始末。  
バカですねえ・・・私。

まあどんな話も発表するまでは大傑作ですから、頭の中にあるうちが幸せなのかもW

## 手紙 ？（前書き）

今回は「比較的」早くUP出来ましたW

文字変換ソフトを変えてみたんですが、慣れないと使いにくいですね。

登録した名詞が出過ぎる……。

## 手紙？

確かに科学 特に宇宙論や量子力学等は時として哲学的な側面を持つことは君も知つてのとおりだ。だからと言って哲学「だけ」で済ませたら、ソレはもう科学じゃない。やはり僕達の会話は科学の方へシフトして行った ように思えた。だが実際は哲学でも科学でもない方向へと変わって行ったんだ。

「ダークマターやダークエネルギーはネーミングがよくなかったね。どうもSFやファンタジーと混同しておる輩が時折現れるようだ。」  
「ただ単に現在の技術では観測不可能だから『ダーク』と表現しているだけなのに、嘆かわしい事ですね・・・。」

「そうだね。観測不可能だからこそ空想の翼がより逞しくなってしまうのかも知れない。」  
「ソレが人間の救いであり、逆に悲劇を生み出す原因の一つなのかも知れません。」

「ふむ。救いなら分かるが、悲劇とは？」  
「例えば僕です。宇宙の果てや時間の始まり、ダークマターやダークエネルギー、いやそこまで行かなくてもこの太陽系の惑星達の姿分厚い大気に遮られた天王星や海王星の内部。数え上げればキリがないほどに僕がこの目で見たい、この手で触れてみたいと切望するモノがあります。どうしても知りたいと。でもソレ等は観測結果から推測するだけのものに留まります。現在の所は。だから僕はソレ等を学び想像するしかありません。」

「ふむ。」  
「しかしどれだけ想像しようと 仮にソレが正解だったとしても、僕がソレに手を触れる事も実際にこの目で直接見る事も叶いません。まるで目の前にぶら下げられた人參を追いかけるロバのような滑稽さを感じます。コレは悲劇ではないでしょうか？いや、喜劇か

な？」

「なるほど。君はどうやら純粹過ぎるようだ。」

「かも知れません。でもそれは悪い事なんでしょうか？」

「いや、悪くはあるまい。決してね。もし仮に罪が有るとしたら、

ソレはCrimeではなくsinの方だね。法的なモノではなく道徳的というか感情的な罪というか。」

「なんとなくは・・・分かる気がします。」

「十分だよ。だが確かに君の言う通り、天王星や海王星でさえ人類が行くには遠過ぎる。何年かかる事やら分からないし帰る事も考えれば絶望的だろう。コールドスリープもまともに『目覚める』事が出来るのか大いに疑問だしね。」

そう、コールドスリープは細胞が受けるダメージが計り知れない

と言うよりもわかっていない。5年10年、或いは20年『眠っていた』場合のダメージはソレだけの期間を実際に眠らなければ分からないんだから。コレばかりはやってみないと分からない。それに『眠っている』んだから突発的な事故が起こった場合に何も出来ないと言う致命的な欠陥がある。2交代で起きているんなら2倍の乗組員を乗せなきゃならない。当然コールドスリープ設備もだ。搭載重量が増える分だけ打ち上げブースターのパワーも必要になるし、とても現在の技術では実用的とは言えない方法論だ。

「そう君がソレ等を実感・体験するには肉体を伴っては不可能だという事だ。」

「事実上不可能である事は分かっています。」

「いや肉体を『伴わなければ』可能だという事だ。」

続く



手紙 ？（後書き）

やっと科学的な話になったと思いきや、いきなりアヤシイ展開になってしまいました（汗

少し展開を急いだ感がありますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7124w/>

---

クトゥルー奇譚？ 彼方からの手紙

2011年12月4日23時48分発行